



俺と蛙さんの異世界放浪記 9

α L P H α L I G H T

くずもち

kuzumochi



アルファライト文庫



主な登場人物

エルエル

ホムンクルス。普段は少女の姿だが、戦闘時には大人の女性に。

セーラー戦士

地球へ戻るため、果てしない旅を続ける美少女。

トンボ

妖精郷に住む^{した}下っ端^ぼ妖精。小さいが態度はデカい。

紅野太郎

本作の主人公。カワズさんによって異世界へと召喚された。魔力は800万1000。

クマ衛門

ナイトさんと行動を共にするダークエルフ。とても愛くるしい。

カワズさん

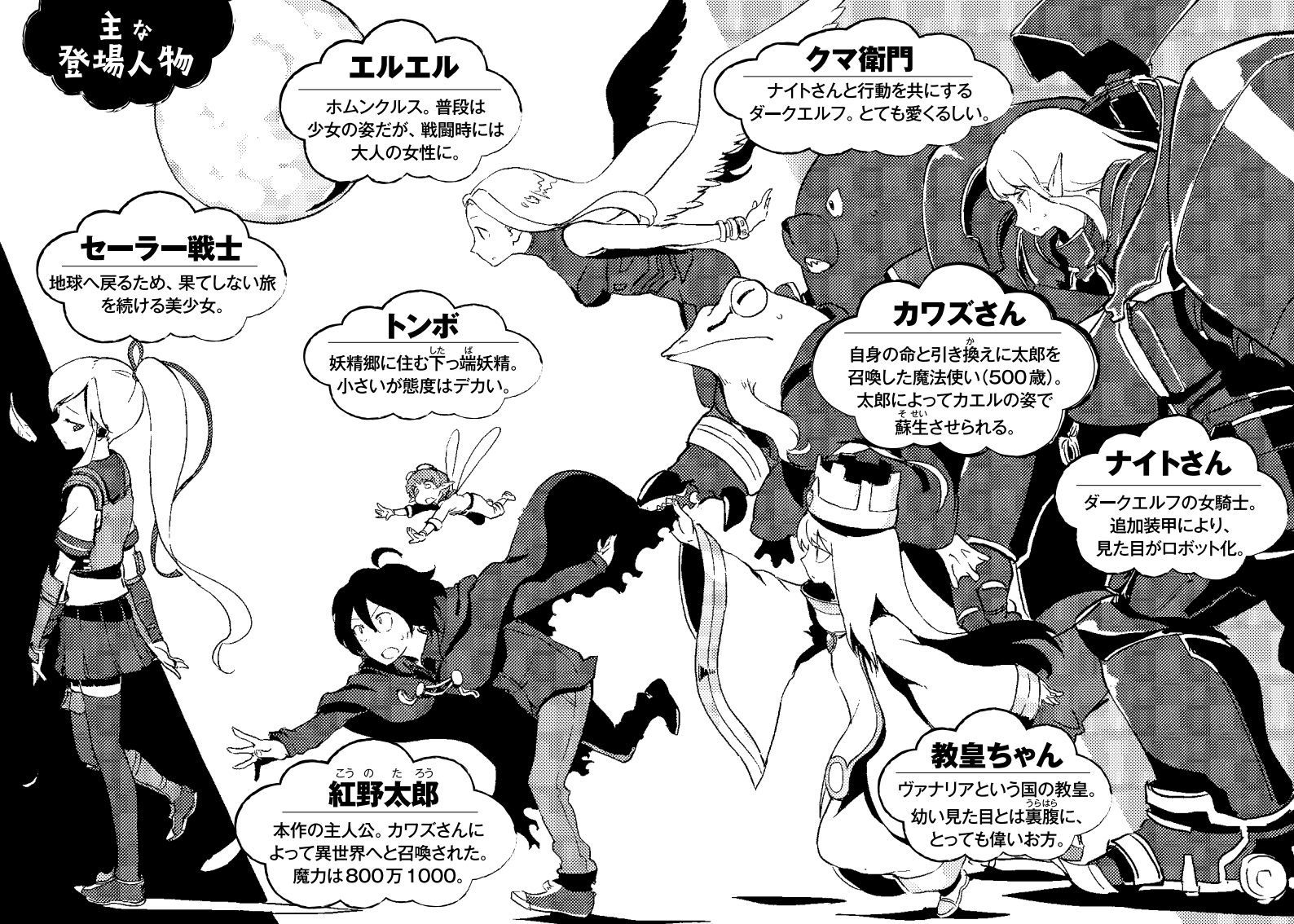
自身の命と引き換えに太郎を召喚した魔法使い(500歳)。太郎によってカエルの姿で^{そせい}蘇生させられる。

ナイトさん

ダークエルフの女騎士。追加装甲により、見た目がロボット化。

教皇ちゃん

ヴァナリアという国の教皇。幼い見た目は^{うらばら}裏腹に、とっても偉いお方。



プロローグ

事の発端^{はつたん}と言えるようなことがあったとすれば、これがそうだったのだろう。

俺達にとっては普段と変わらない会話だったが、聞く人が聞けば、とんでもない内容が含まれていたのかもしれない。

さて、件の会話^{くだん}は、次のような経緯^{きゐ}でなされたのであった。

その日、我が家を訪れたのは、スケさんである。

竜の谷に棲^すむ偉大な竜の末裔^{まつえい}は、人の姿を取って俺達の前に現れた。

俺、紅野^{こうの}太郎^{たろう}は、彼を迎^{むか}えるため、いつも通りの黒シャツ、黒ジーンズに黒マント姿ではあるものの、なるべく失礼^{れい}じゃない程度には身だしなみを整えていた。

ミヨンミヨン跳ねるアホ毛の動きも、心なしかさつちりとしていたことだろう。

しかし、訪れた友人の格好は、そんな俺よりも遥^{はるか}かに気合いの入ったものだった。

俺は、啞然^{あぜん}としながら言う。

「あー。いや素質はあると思ってたよ、素質は……」

「素質ってなんのことですか？ タロー殿？」

ハートマークの付いた針巻に、ピンクのハッピが目にも痛い。背中のリュックに差した団扇もなかなかの味を出していた。

いやまあ、大したことではない。それらもろもろの衣装や小物を私服感覚で身に着ける彼の姿が、ある意味、彼本来の姿である竜の姿以上のインパクトがあったというだけで。だがしかし――。

それでも友人として言うておくべきかもしれない。そう考えて俺はあえて注意した。

「アイドルにはまるのも、ほどほどにした方がいいと思うんだ……。なんというか、私服でそいつを着こなすのは、いくらなんでもレベルが高すぎるというか」

できる限り当たり障りのない言葉を選んだが、スケさんは忠告に耳を貸せる段階はどうに通り返しているみたいだった。

「はまるとかそんな軟弱な表現はやめていただきたい！ 彼女は我が心の伴侶なのです！ と言つても、もちろん手を出すつもりはありませんがね。ファンクラブ会規に抵触しますので！」

「……」

快活に笑って語るスケさんを見て、俺の背中にうつすらと冷汗がにじんだ。

これはどうも間違った形で文化が伝わってしまったのではないだろうか？

ちなみに、スケさんの言う「ファンクラブ」とは、俺がプロデュースしたある少女を崇める団体である。あくまで趣味を他人と共有するための組織で、それ以上のものではないと信じていたが。

せめて、衣装についての違和感だけでも伝えておくことにした。

「いや、でも節度は守ろう。新しいものは、時としておかしく見えることもあるんだ」

「む、そういうものですか？ ようやくかつこよく思えてきたのですが」

「マジでか！ ……んー。いやでも、お祭りのときとかだけにしておいた方がいいよね、やっぱり。普段着にしたらありがたみがなくなるし」

「それもそうですね。今後は気をつけますよ」

スケさんは俺の意見に耳を傾けるくらいの冷静さは、残してくれていたようだ。

大丈夫さ。みんな暴走したりはしないはずさ、うん。

気を取り直して、俺はスケさんをリビングに案内した。リビングには、すでにお茶菓子も用意しており、準備万端である。

「文化の正しい理解の仕方については今後の課題にしておくとして。それでスケさん、どうしたの？ 相談したいことがあるって話だけど」

さっそく用件を尋ねると、スケさんは背中のリュックを下ろして、急に真面目な表情で頷いた。

「そうなんですよ。実は、タロー殿から普及ふきうさせるように頼たのまれているパソコン関係のことで少しばかり気になることがありまして、一度お知らせしておこうかと。少々特殊な話になりそうなんです、いいですかね？」

スケさんが真面目な相談だなんて珍しい。しかし、特殊な話なら俺だけでは心許こころもとなさそう。

「ふーん。じゃあカワズさんもいた方がいいかな？」

「はい。できればお願いします。ご在宅で？」

スケさんも俺と同じように思ったのか、カワズさんの参加を承諾しょうだくした。

「あー。たぶんいるね。すぐ連れてくるから。何か準備があるなら先にしといてくれる？」

「はい。それではお願いします」

俺はカワズさんを呼びに行った。

俺に引っ張り出されたカワズさんは、着ているローブをだらしく引きずって眠そうにしていた。徹夜てつやで実験じけんでもしていたのか、蛙特有の横に長い瞳孔どうこうをより細めて不機嫌ふきげんそう。

「何じゃいったい？ パソコンはお前さんの管轄かんかつじゃろ？ 相変わらず、欲望おもむの赴おもむきままに非常識ひじょうしきを振りまいておるんじゃないろう？」

「言うこと全部失敬しつけいだな。言っておくけど、常識は常に意識してるし。ただ、ぎりぎりを

見極めようとしてすぎて、たまーにやりすぎるだけで」

「ダメじゃろそれ」

「いやいや、そこを恐れてどうするよ？ ダメなところか、俺の永遠のテーマなわけじゃないか？」

俺の意見を聞いて、カワズさんは渋い表情を作った。

「お前は単純に魔法を極めりゃよからうに」

「おいおい、何燃えるセリフを言ってくれちゃってんのさ。もちろんそっちもやっているとも。むしろ自主的に趣味にも魔法を使って、日々の鍛錬たんれんを怠おこたらない俺って勤勉きんべんじゃないか？」

「……あなたが間違ってもおらんのが厄介やっかいなんじゃよな」

話をしている間に、カワズさんもようやく調子を取り戻してきたようだ。

俺とカワズさんがリビングに到着すると、スケさんは世界地図を壁に貼はり出したところだった。

その姿は、ファンクラブファッションからいつもの鎧姿よろひに戻っていて、スケさんとしても真面目な話をする準備万端びんぽうみたいである。

「おお、いらっしやいましたか」

「それでどうしたんじゃないか？」

「とりあえず、調査結果を書き込んだこちらの地図を見ていただきたい。詳しい話はそれからということ」

「ふむ」

スケさんが貼り出した世界地図にはびつしりと書き込みがあった。たくさん赤い線が地図全体に引かれているのが印象的である。

適当に椅子を引っ張り出してきて座った俺が「あー。中間報告ですな」と指摘すると、スケさんは咳払いしてこちらに向き直った。

「まあ、そうですね。えーおっほん。これは現在のパソコンの配布状況です。おかげさまで順調にユーザー数も伸び、ラインの調査も進んでいます」

俺が頭を下げる。

「スケさんのご協力には本当に助かっています」

ここで軽く説明させてもらうと、「ライン」とは世界中を流れる魔力の道と言うべきものである。

俺は、そのラインを利用することで、複雑な魔法の集合体であるパソコンを使用者の魔力なしで動作させることに成功したのだ。

スケさんには、このラインの位置を調査してもらいながら、パソコンを配ることに協力してもらっている。

地図に描かれている赤い線は、調査で明らかになったラインの位置、黒い点はパソコンを配った箇所である。黒い点がかなり書き込まれているので、順調にパソコンユーザー数が増えていることが窺えた。

俺は、几帳面に調査結果が書き込まれた地図を感慨深く眺めて呟く。

「ふーむ。こうやって見ると、だいぶ増えてきたもんだなあ。俺ってこんなにパソコン作ったのかー。我ながらよくやったもんだよな」

スケさんも自らの成果に誇らしそうにする。

「確かにお互いかなり無茶をしたものですよ」

「勢いって怖いよね。スケさんもよくまあ、あんな怪しい箱を配りまくったもんだよ」
実際、パソコンがここまで早く広まったのは、スケさん達竜族の活躍が大きかった。

ところがスケさんは、笑えないことを言う。

「ほとんどゴリ押してところは否定できませんがね！」

「ははは……。お手柔らかに頼むよ？」

「もちろんですとも。ゴリ押ししたとはいえ、ちゃんと使ってもらっているようですから、この方針は大筋で成功だと確信しています」

スケさんはやはり自慢気であった。

そもそも最強種族である竜から押し付けられた物など捨てられるわけがない。そういう

意味でも、ここまで普及したのはスケさん達のおかげということだろう。

そう考えて複雑な心境でいると、スケさんが話を仕切り直した。

「まあ、パソコンを普及させた成果の話はこの辺りにしておきましょう。今回、気になったというのはそこではないのです。実はこのラインをチェックしていくうちに、どうにも面白いことを発見しまして」

「面白いこと？」

「はい。と言っても、その情報が役立つかどうかはわからないんですが」

どうやらその面白い発見というのが、先に言っていた「特殊な話」に繋がってくるようだ。スケさんの若干もったいぶった話し方にカワズさんは好奇心を刺激されたいらしい。

「なんじゃね？ 面白いこととは？ ラインに関してはむしろまだまだわかんことが多いからのう」

カワズさんがそう言うのと、スケさんが自慢気に告げる。

「それはそうでしょう。空を制する我らだからこそ、気づいたことだと思いますので」

俺も興味津々で身を乗り出す。

「そうなの？」

「はい。よく見てみてください。こうやって目に見える形にすれば、パッと見ただけでわかるでしょう。地図に注目です。何かがつくことはありませんか？」

「……えっと、そうだね」

言われてみれば確かに変だ。赤い線が引かれている箇所^{かしよ}に、妙な偏り^{かたよ}を感じた。めっちゃくちゃに引かれているようで、一定の規則性があったからだ。

「……線が一か所に集まっている？」

俺は赤い線を指しながら言った。赤い線は蜘蛛^{くも}の巣のように放射状に引かれ、ある一点に集まっていたのだ。

俺の指摘はスケさんの求めていたものだったらしく、彼は頷いて告げる。

「その通りです。こうやって見るとですね、ラインというのは、ある中心から流れ出している、もしくは収束しているように思えるのですよ」

スケさんが赤い線をなぞっていくと、地図の中心辺りにたどり着いた。

だが、その指が示す先には――。

「でも、中心部分にはラインがないじゃん」

俺が指摘すると、まさにそれが話の肝^{きま}だったらしく、スケさんが興奮して言う。

「そう！ そうなんです！ 実は実際にそこへ出向いてみたんです。で、タロー殿からもらったラインの探知機を使ってみました、何の反応もありませんでした。周辺には魔力の流れが集まっているのに、この一帯だけぽっかりと何もないんです。切り取られたみたいですよ？」

スケさんは鼻息を荒くして、ポフツと鼻の穴から炎を吐いた。

「へー。いかにも何かありそうなのにね」

「確かに面白い」

俺とカワズさんが感心して声を漏らす。さらにカワズさんはテンションを上げて、この話に本格的に加わってきた。

「わしも昔、自分の国でラインについては調べたことがあつてのう。おそらくラインは中心から流れ出しているのではなく、中心に向かって流れ込んでおるはずじゃよ」

「ほう！ わかりますかカワズ殿！」

思わぬ情報を聞き、スケさんの顔が輝く。

「ムオツフォツフォ。まあ。これくらいは当然じゃよ」

俺はその笑い方から、カワズさんがものすごく得意になっているのを感じ取った。こういうときに発揮されるカワズさんの五百年の知見は伊達ではないと思う。なんだかんだ言つて、カワズさんに尋ねると大抵のことに答えが返ってくるし、答え自体を持っていないくても、そのきっかけになるヒントくらいは持っているのである。

スケさんは場が温まってきたところを見計らって自前の差し棒を取り出す。そして、その棒で地図の中心を指した。

「この大陸の中心ですが、『空白の荒野』と呼ばれていまして、昔から何もない荒れ地

だったらしいんです。これは父上に確認しました。しかしそれ以上の情報がない。この地について心当たりがある奴を仲間内で探したのですが、誰もいませんでね。ここは一つ、魔法に精通しているお二方に聞いてみるのもいいのではないかと思った次第なんです……」

カワズさんと俺は互いに顔を見合わせ、そして首を横に振った。

「なるほど。わからんな」

「まあわからないね。まるっきり」

スケさんもすんなり答えが出るとは思っていなかったみたいで、「そうですか」とあつさりした反応だった。

しかしここで諦めないのが、魔法使いつてもものだろう。

カワズさんは、スケさんの地図に再び向き直ると、何かぶつぶつ呟いた。

「ふうむ……。わしもその辺りに特別な何かがあったという記憶はない。だが、大地のラインをすべて集束したスポットなんぞがもしあれば、魔石の一大産地になつていてもおかしくないはずなんじゃが」

「でも、そこだけばかり何も無いんだもんなあ」

俺は、地図上の何もない荒野の辺りをぼんやり眺めた。

現状では情報が少なすぎて、「面白い」以上の感想は出てこない。

それはスケさんも同じだったのだろう。だからこそスケさんは、俺達のところに来たのだ。スケさんが困ったような表情を浮かべて俺に話し掛ける。

「そんなものだと行ってしまえばそうなのですがね。タワー殿はどうですか？　我々この世界の者には思いつかないような意見をどうぞ」

「また難しいフリをするなあ……」

俺は口を尖らせ^{とが}る。でもまあ、そう気負^{きお}って返す質問でもないようだ。

「まあまあ、面白いではないですか。こういう話も」

「そうじゃぞ？　何か言うてみる。思わぬ議論のきっかけになるかもしれない」

スケさんとカワズさんはすぐ期待しているようでもあり、まったく期待していなさそうでもあった。どうせ俺が妙なことを口走って笑いのネタになればいくらの腹積もりなのだろう。

「……そんなこと言われてもなあ」

そう言いながらも、俺はこは是^ぜが非^ひでもいいことを発言したいと思った。

俺もカワズさんにならって真剣に地図を見始める。すると、すぐにひらめくものがあった。なんとなく思いついたそれを口に出す。

「世界の魔力が集まる場所か……。なら、でっかい魔石でも出来てるんじゃないの？　この荒野と同じ大きさくらいのやつがさ」

カワズさんとスケさんはニヤニヤしながら俺の顔を見た。

「ほほう。なるほどのう。巨大な魔石か。そんな魔石があるなら一度お目にかかってみたいもんじゃ」

「そうですね。しかし、空白の荒野のサイズなんて、いくらなんでもでかすぎでしょう……」

「いやいや、あるかもしれないよ？　でっかい魔石。そもそも魔石は天然の魔力が固まって出来るもんなんだろう？　なら、俺の作ったセンサーでは反応しないかもしれない。アレはあくまで魔力の流れを探るものだからさ」

俺がスケさん達に渡したセンサーはそうなっていたはず。魔力が結晶化した魔石には反応しないということもあるだろう。

「魔石も何も、そこは荒野で、何もないって話なんじゃけどな」

カワズさんはプツと噴き出した。

ちよつと悔^くしくなった俺は、思いつきの話をさらに広げてみた。

「いやいや。例えば、相当地下深くに埋まっているとかかもしれないし」

「それはありませんよ、タワー殿。そんな馬鹿でかい魔石があれば誰かが気づいてますって」

若干苦しい広げ方であったためか、スケさんにまで鼻で笑われてしまった。

さらにカワズさんが否定してくる。

「そうじゃぞ？ スケさんの言う通りじゃて。そんなものがあれば、何らかの影響があってもおかしくはない」

しかし完全に笑いにされているというわけではないようで、カワズさんはその巨大魔石についてロマンを感じたようだった。

「だが夢のある話ではあるな。もしそんなものがあつたらすごいのう！ 世界中の魔力を集めたら、いったい何ができるんじゃないろう？ それこそ、神にでもなれるんじゃないか？」

ただ俺の方は、カワズさんの大げさな言葉でちよつとだけ冷静になる。

「うーむ……やっぱ現実的じゃなかったかな？」

二人が言うように、そこまででつかい魔石が埋まっていれば、魔法使いなら気づきそうなものだし。

手のひらサイズの魔石でも数百の魔力を貯蔵できるというのに、そんなにたためなサイズの魔石があるとしたら、どれだけの魔力を溜められるというのだろうか。

「いや！ じゃあ誰かが大昔に持っていた説なんてのはどうだろう？」

さらに一歩進めた説を展開してみたが、この第二案もカワズさんには響かなかつたらしい。

「どうなんじゃろう？ そんな話は五百年間一度だつて聞いたことないぞ？ それに、持

ち去られたのだとしても、ラインはそこに集約しているのだから、新しい魔石が出来てもよさそうなもんじゃ。そもそも世界中から集まる膨大な魔力はいったどこに行つたのかという問題も出てくる」

「消えた魔力の行き先か……」

俺がそう呟くと、スケさんが口を挟む。

「あ、ちよつと待ってください。今書き留めますので」

どうやらスケさんは出てきたキーワードをマップの端っこにメモしているらしい。せつかく記録してくれるのだから、もう少しだけ妄想を語るのもいいだろう。

俺は頭をひねつてさらに一つ新しい説を出した。

「なら新説！ 魔石は空にあつたんだ！ かつて巨大文明に活用された魔石は今も地上の魔力が流れ込み、その魔力を使って空を彷徨っているのだ！」

ちよつとロマンのある回答だと思つたのだが、カワズさんは呆れ顔だった。

「空に物体を浮かべること自体はそう難しくはないわい。魔力もそんなに必要とせんぞ？」

「マジか！」

スケさんもまたそんなに驚いてはいなかった。

「そうですね。タロー殿だつて竜の谷で見たでしょう？ 浮遊する鉱石はありますしね」

「そ、そうか。そうだったね」

二人に指摘されて気づいた。こっちの世界では、巨大な物体を浮かばせることも不可能ではないのだった。

さらにカワズさんは困惑したような表情を見せて言う。

「そもそも何もないというのが変なんじゃよ。仮に巨大な魔石があるとしても、世界で無限に生成される魔力を無尽蔵に溜め続けるなんてできるわけがない。集まった魔力を誰かが常時使い続けているのかのう？ もし使い切っているとすれば……それはどんな大魔法だという話だ」

カワズさんの言葉は、後半には冗談交じりになっていた。

俺にもう話を広げるアイディアはない。

「だよなあ。じゃあやっぱり、ラインは集まっているけど何も存在しないって、そのまま受け入れるしかないのかもしれないよな……」

ただスケさんが書き出していくキーワードを目で追っているうちに、妙な何かが俺の頭に引っかかった。

山よりかい魔石

世界中の魔力を常時使い続けている大魔法

「……」

気づくと、俺は黙り込んでいた。

誰にも見つかりそうにない場所で、俺すら凌駕する馬鹿な所業。そんなものを俺は目撃したことはないだろうか？

カワズさんとスケさんも俺のおかしな様子に気づいたらしい。二人は怪訝そうな顔で俺を見つめる。

「どうしたのですか？ 突然黙り込んで」

ちょうどスケさんに尋ねられたとき、俺はこのもやもやの原因をようやく探り当てたところだった。

「いや、そう言えば、どこかの木の上で山以上にでっかくて非常識なものを見かけたことがあったなーってさ」

「何じゃ？ そんなことあった……かの？」

俺の台詞でカワズさんの顔色が急変した。どうやらカワズさんも思い出したらしい。

俺の顔ももちろん、カワズさんに負けず劣らずおかしなことになっていた。

俺とカワズさんの脳裏をよぎったモノは同じだったろう。

明らかにやばそうだったものだから、見るだけにして俺達はスルーしてしまったわけだが、それを目撃したことは間違いない。

遙か高く雲の上。馬鹿でかい星のような物体を、俺達はこの目で見た。それを見た場所は、人間のテリトリーから人外のテリトリーへと入る境目。それは大陸のちょうどまん中くらいの位置にあった。

あまりに大きすぎ、さらにその物体を覆う結果が干渉して全体像すら把握できなかったが、もしかしたら俺達が見たのは、その結果の端っこだったのかもしれない。

だとすれば、あの星の真下は、ちょうど例の荒野の辺りか。

「アレの中にもし超下級の魔石が入っていたら、ひよつとするとすごいことになるかなと……、なんか複雑な結果が張ってあったみたいだったし」

念のため言っておくが、俺の言っていることはすべて推測である。

その辺りをわきまえているのか、カワズさんも過度に真剣にならずに、脂汗を流しながらもにこやかに笑い飛ばしていた。

「い、いや。しかしじゃね、それはさすがに……」

「何の話をしているんですか？」

俺達がこそそ話していることに、スケさんは不満そうだ。

隠すこともできたが、今さら隠すようなことでもないだろう。そう思って俺は明るく切り出した。

「ああ、ゴメンゴメン。実は昔、少し魔法をしくじって雲まで届く木を生やしちゃったこ

とがあつてね。で、いろいろあつて雲の上に塔を建てたりして遊んだんだけど」

「何やつてるんですか。貴方達は」

「いやー、そう言われちゃうと恥ずかしいんだけどね。その塔の先端がさ、なんかでつかい結果に干渉して空に……。なんて言えればいいのか、つまりね、もう一つの地面みたいなものにぶつかったことがあったんだよ。あそこならデカイ魔石も隠せるし、それを使える神様がいてもおかしくはないかなってさ」

言葉してみると、スケールが大きすぎて逆に陳腐にさえ感じる。

スケさんもまた、俺の話を聞いて困惑していた。

「本当ですかそれ？」

スケさんは信じていなさそうだが、俺だって実際見なければ信じられなかった。

だがしかしである。こんなときに、しみじみと思い出されるのは、こっちに來てから出会ったいろいろな知り合い達の顔だった。

「いや俺だってそんな馬鹿などと思うよ？ でもこっちに來て俺もいろんな奴に会ったもんだ。獣人に妖精、エルフにドラゴン。悪魔なんて奴もいたし……この間なんて天使が空から落ちて來たんだぞ？ そうだよ……天使。エルエルも空から落ちてきたんだつたよ、そう言えば」

「……そうじゃのう」

カワズさんがいよいよ顔をそむけて頷く。

だから俺は、特にふざけるでもなく、極めて平然と思いついたセリフをポロリと言ったのだ。

「……なら、神様くらいいるんじゃないか？ 普通に」

まだもろもろの延長線上で、納得できる範疇だと思っていたが、俺の認識はおかしかったのかもしれない。

「……」

「……」

二人は顔を見合わせ、信じていないというよりも、信じたくないという反応を見せた。

「まさか……いくらなんでもそんなことはないんじゃないかの？」

「要するに、タロー殿みたいな存在が他にもいると？」

そんな二人に俺は、さらに仮説を展開する。

「いや、デカイ魔石のおかげでほとんど無尽蔵に魔力を使えるとなれば、確実に俺よりやばそうな奴だね。あれ？ そういえばこっちの世界の人間って神様を信仰してなかったっけ？ いらないって言っちゃっていいの？」

そこところが少し気になったが、カワズさんもスケさんも特別信心深いというわけでもなさそうだった。

「いや、ああいうのは、見えないものであって、実在してはいけないような……のう？」

「厳密に言えば、神のような強大な力を持つ存在に抵抗はないんです。竜を信仰し、神と呼ぶ者達もいますしね。でも……タロー殿よりもやばそうな存在などいてたまるかっけですし」

「そういうこと言う？ まあ、そりゃあ、神を実際に見る機会なんてないだろうとは思っけど」

仮にいたとしても、おいそれと触れていい話題ではないというのは、なんとなく理解できた。だから、こんな推測は野暮以外の何物でもないのかもしれない。

「……まあそりゃそうか。触らぬ神に祟りなしって言うもんね。これはここだけの話ってことにしておこうか？」

俺は、これ以上この話題に首を突っ込むのをやめておいた。

カワズさんもスケさんも、賛成らしく同時に頷いていた。

「そうじゃな。わざわざ確かめんでもいいこともあるじゃろ」

「ちょっと見てみたい気もしますがね……。ところで！ この間のコンサート最高でした！ ファンクラブ一同で現地に行きましたよ！」

スケさんに至ってはすでに興味もなくなったのか趣味の話振ってきたので、俺もあえてその話題に乗っかる。

「行つたの!？」

「はい！ 何のための翼ですか！」

「いや、少なくともアイドルのコンサートに駆けつけるための翼じゃないと信じたいんだけど」

「いやいやいや、これくらいの労を惜しんでどうします？ まあそんな苦勞も近日中には解決すると思いますが」

「……何、その怖い台詞」

「何も怖いことはありません。タロー殿が映像系の魔法を随分充実させましたからね。その恩恵を私達は存分に活かしているという話です」

「ええー。また俺のせいになりそうじゃない？」

その後スケさんの熱いアイドル談義で、神の話はやむやになつてしまつたのだが。

「？」

その時、視線を感じて、俺は振り返つた。

しかし、そこには誰もいなかった——その時は。

事が起きたのは、三日後のことである。

1

一日目。

事件は日々何かしら起こっている。

特に俺の周囲では起こりやすい。

いつだって俺は事件が目の前に転がってくるまで気がつかないのだが……。

その日は珍しく、ちょっとした変化に気がついた。

「そういえば、トンボはどこ行つた？」

俺は愛用のエプロンを畳みながら、おなじみの妖精の姿を探していた。その妖精——トンボは俺の家に出入りしている、 جوجلがトレードマークのピクシーである。

いつもは大概、家の中をちょろちょろしているはずなのだが、あの目立つ赤い頭が見当たらない。

もちろんトンボも常に家にいるというわけではない。しかし、朝ごはんを作つたというのに姿を見せないのは珍しかった。

料理人仕様からいつもの黒シャツ、ジーンズ姿に戻つた俺は、髪の毛を「？」の形に動

かした。

今日もアホ毛ワックスは好調である。

「カワズさん、トンボがどこ行ったか知らない？ 早くしないと冷めるんだけど？」

早々に朝食のスコーンにかじりついていたカワズさんに聞いてみると、蜜でベタついた手を舐めつつ首を横に振った。

「さあ？ その辺におらんのか？ 甘い物が置いてある棚とかにいる確率が高いぞ？」

「……どうりで、置いてある分がなくなるのが早いと思ったよ」

犯人はトンボだったか。

「何らかの対策をとっておいの方が賢明じゃろうな。何かないかのう？ 妖精対策」

カワズさんもそれなりにトンボの被害を受けているようだ。

「虫じゃないんだから。そんなに頻繁^{ひんぱん}つてわけでも……あるのか？」

「あるんじゃないよ！ タローよ……、ピクシーはいたずら好きなんじゃよ？ そりゃあ確かに少しは自重^{じちゆう}しているようだがのう？ お前に比べてわしの方は、幾度^{いくど}となく奴らにおやつを横取りされておる……。思い出したら腹が立ってきた。一度痛い目を見せてやってもよからう！」

そう言っただけでドンツとテーブルを叩くカワズさん。目がマジだ。

「おやつを盗られたくらいで、そんなに怒らなくても」

「別に怒ってはおらんが……一度や二度ではないからのう」

「ふーん。俺はあまり見ないけど……何でカワズさんは盗み食いするトンボとの遭遇^{そくぐう}率が高いんだ？」

俺がそう指摘すると、カワズさんはさっきまで怒っていたはずなのに、完全に感情を消したような表情で首を振った。

「いや。たまたまじゃよ。ホントにたまたま」

「あんた、まさか？」

カワズさんもトンボと同じように盗み食いしていたのだろう。二人の間で、そんなにおやつの取り合い戦争が激化しているなんて知らなかった。

「そういえば、俺もいたずらならトンボに何回かやられたことはあったなあ」

「トンボはお前さんに怯^{ひる}まんからのう……。心配になるくらいに危険に鈍感^{どんかん}じゃよな、あいつ」

「それはあるなあ。まあ、だからこそ仲良くしてもらってるところはあるんだろうけども」

カワズさんが言うように、トンボの無鉄砲^{むてつぽう}さには冷や冷やさせられていた。調子に乗るとどこまでも調子に乗る。それがトンボなのだ。

「お前にしてみれば貴重な友達じゃもんな」

「……いや、まあそうだけど。今はおやつ盗む奴と俺が同レベルみたいで肯定しづらいから、そう言うのはやめてくれ」

ともかく、トンボのおやつ泥棒どろぼうの件は俺も被害者なわけだ。自分で作ったり、人からもらった美味い物が、口に入る前になくなるのはさびしい。

棚には、何かホイホイ的な物でも入れておくとしよう。ちなみにホイホイで捕まえるターゲットは、妖精だけでなく蛙でもある。

「そうだな。まあ何か考えてみるよ」

「うむ。早急に頼む。しかし朝飯に出てこないのは確かに珍しい」

「だろう？」

そしてようやく元の疑問に戻ってきた。

「うーん。いつもは断つても座ってる感じのになあ」

すっかり冷えてしまったスコーンを一口かじってみたが、出来は悪くない。料理に問題があることを察して、姿を隠したというわけでもなさそうだ。

「なんせ食い意地いじが張っておるからのう。まあ、あやつにも用事がある日はあるんじゃないやうて」

そう言うのと、カワズさんは残りのスコーンを平らげた。トンボの不在を大して気に留めておらず、大丈夫だと思っているらしい。

「……まあね。でもさ、トンボも前もって言うてくるはずなんだよな、朝食を不在にするなら」

「そうじゃな。トンボにとって朝食がないという状況はもつとも避けたいじゃろうし
のう」

さて、カワズさんも推理してくれているので、それに乗って俺もまたトンボの行動パターンから推理してみるとしよう。

そもそもなぜトンボは何も言わずに消えたのか、ということが重要になってくるはずである。こういう場合は、後ろめたいことをしでかしていることが多いから。

「俺達に黙ってやることなんて、それこそ、いたずらくらいなんだろうけど」

「それか、ばれたらまずいことかな」

だが、俺に推理できたのは、このくらいまでだった。トンボは隙すきさえあればいたずらしてくるが、朝飯を我慢してまですることじゃない。

まだ推理も序盤じょばんだというのに、さっそく材料が切れてしまった。俺は、こういうことにはあまり向いていないようである。

「まあいいや。トンボのことはとりあえず放っておいて、エルエルを呼びに行くかな」

俺はあつさりあきらめることにした。

エルエルとは、我が家で日々すくすくと成育中の天使のような少女である。

背中に生えた伸縮自在の羽と、青みがかった薄い緑色の髪が特徴的で、その格好はファンタジーよりもSF寄り、ぴったりと体に張り付くような黒スーツ姿だった。

カワズさんは、朝食にエルエルを呼ぶことに疑問を感じたのか、尋ねてくる。

「エルエルは飯はいらないんじゃないか？」

「そうだよ。あの子、太陽光だけあれば生きていけるからね。まあでも食欲は旺盛みたいだし、そろそろ食育の方に力を入れてもいいかなと」

「食育ってお前なあ。人間ベースじゃから問題ないと思うが、どうなんじゃろ？」

「どうなんじゃろと言われてもなあ。おいしい食事を楽しめるようになった方がいいに決まっているだろう？」

トンボに対する心配とは種類が違うが、最近エルエルに急激な変化があつて、こちらも心配の種になつていた。

俺は彼女の最近の様子を思い出し、軽く息を吐いた。

「なんにしても、いろいろと気にかけてはおきたいわけなんだ。最近、エルエルはどうも自室に閉じこもりがちでさ」

「ん？ そういえば外で見ないのう？」

カワズさんは心配そうにしてくれたが、別にエルエルは病気になるのかさういうことではない。

「いや、今、すごく勉強熱心で……。実際に彼女を見てみてよ、カワズさん。言葉で説明するより直接見てもらった方がいいかも」

俺はカワズさんを連れて、エルエルに声を掛けに行った。



部屋を中心にミステリアスな少女が佇み、その周囲を数百もの青白い画面が飛んでいる。よく見れば、浮遊するディスプレイには文字が高速で流れていた。俺がエルエルのためにだけに作り上げた、高速文章表示魔法である。

カワズさんは、この世界にそぐわない近未来的な光景に面食らっているようだった。

「なんかものすんごいことになっておるのう」

「だろ？ 紙をめくらなくてはならない本のような媒体では効率が悪いってエルエルがねだるから、ついがんばってしまった」

「……要求が高度じゃな」

「……俺もそう思う」

ねだると言っても、もっと効率的に情報が収集できるようにはならないか？ と極淡白なトーンで言われただけなのだが。



ちなみに俺が用意してあげたこの魔法は好評だった。結果として、エルエルが部屋からあまり出てこなくなってしまうことが俺的に大失敗なんだけど。まあ、エルエルが喜んでくれるのなら、些細ささいといえは些細なことである。

「とにかく勤勉きんべんなことには違いな。エルエル？」

「はい・なんでしよう？ タローさん」

このように、どんなに忙しそうでも声を掛ければ反応してくれるのだから、まだ俺は大丈夫だ。俺は続けてエルエルに話し掛けた。

「調子はどうだい？」

「システム・オールグリーンです・情報収集を続行しても・構いませんか？」

「シ、システム？ そ、そうかー。あまり根詰こんづめないようにな？」

「はい」

「何じゃ今のセリフ。……タロー、お前変なこと教えるなよ？」

途端に不安そうな表情を浮かべたカワズさんである。

俺だってキャラを崩壊ほうかいさせるような知識を教えたつもりはない。とはいえ、子供とは往々おちおちにして親の変なところを見ており、真似まねしてしまうものだ。だとしても、俺はいつ「システム・オールグリーン」なんて言ったんだろう？ 謎である。

エルエルは、こちらに顔を向けたついでに、その視線をカワズさんへロックオンした。

「カワズさん・質問があります」

「なんじゃね？」

「カワズさん・魂とは・なんですか？」

「た、魂か？ 生き物が皆、宿しているものかのう？」

「なぜ・宿するのですか？」

「そこに理由はなからう」

「人は・いつたいどこに行って・どこに帰るのですか？」

「……とりあえず、家でいいんじゃないかのう？ ……タロー、何なんじゃこれ？」

怒涛の質問ラッシュに戸惑うカワズさんは俺に助けを求めるが、俺だつてわからない。

「言つたらう？ 勉強熱心だつて。質問大好きなんだよ。暇なときは図書室で読書。相手がいるときは質問の繰り返し」

「何でそんなことになった？」

「知らない」

「いいのかそれで？」

カワズさんは呆れ顔だが、俺としてはむしろいい傾向のような気がしている。

「うーん。いいんじゃない？ あえて原因を挙げるとすれば、俺が魂の話をしたのが原因かな？ それ以来、魂の存在に興味津々なようだ」

エルエルの元になった天使型のホムンクルスは、命令を聞くだけのロボットみたいなものだった。それをホムンクルスに詳しい専門家と共に、まったくの別物というほどに改良を施し、新しい魂まで詰め込んだのがこのエルエルなのである。それでもやはり元の体は、何らかの形で今のエルエルに影響を与えているのだと思われる。

詰めた魂の影響なのか、急速に自我に目覚めたエルエルは、元々の自分との違いに気がつき始めているようだ。

「実際そうなのか？」

カワズさんはエルエル本人に尋ねると、エルエルはひとまず言葉にして現状を説明した。

「はい・私は何者なのか・私は知らなければなりません・以前との決定的な差異は魂の有無・にあると思われませんが・私は・それを認識できません」

「ふむむむ。答えが出なさそうなことを考えよるのう」

「だろう？ まるで哲学者だよ」

困り顔のカワズさんだが、いい機会なので俺はこつそりとカワズさんに耳打ちした。

「でも魂の有無を証明するって難しくないか？ エルエルはちゃんと理解できなきゃ納得してくれなそうだし」

「普通はできんな。お前ならがんばればいけるんじゃないか？ 例えば、目に見えるようにするとか」

「できたとしても、これが魂だよって見せて、その行為にどれだけの意味があるんだって話だよ」

「確かに訳がわからん気はするのう。そもそも魂ってのがよくわからんところがあるから」

カワズさんの言葉は、俺にとつてなんだか意外だった。割と頻繁に魂をいじるようなことをやっていたイメージがあったから。

「ええー。なんであの世に一回片足突っ込んだカワズさんが、魂に対してそれくらいの理解しかないんだよ。おかしいだろ？」

「そうか？ いや実際よくわからんだろう？ 魂が入っていないくても動くものはあるわけじゃし。幽霊のように魂だけで動くものもある」

「ま、まあねえ」

「わしの魔法研究では、どちらかといえば無生物をよく扱っておったし。魂はなくとも動けばいいなどところがあるからのう」

結局カワズさんも、こういうことにはあまり詳しくないみたいだった。

「カワズさんって、適当なところあるよね」

「そもそもお前がエルエルに魂を入れたんじゃろ？ 作った本人が説明できないってどういうことじゃよ？ スパツと説明してやればよからうに」

カワズさんの言う通りだが、わからないものはわからないと言っしかなかった。

「そんなこと言ったって、俺だつて魔女さんから、これには魂が入っていないって言われて勢いでやつちやつたところあるし。わかるだろう？ そういうとこ適当にやつちやえるのが、魔法創造だつてさ」

「まあ。結果以外すべて謎なんてこともざらじゃからのう」

「そういうこと」

「これは・私が・解決すべき・問題です」

俺達の話し合いはエルエルの一言で中断させられた。どうやら俺達のヒソヒソ話が聞こえていたらしい。

無表情の中にも気合いの見え隠れするエルエルがそこまで言うのなら、応援してあげたいが、問題が問題である。

「わかったよエルエル。でも、何かヒントだけでもあればいいんだけど……」

さつそく俺が弱音を吐いていると、カワズさんがなかなかいい案を出した。

「ふむ。なんならそのうち旅にでも連れて行ってみるのもいいかもしれんのう。実体験に勝る情報はあるまい」

「それいいかも。旅に出て価値観が変わる人はいららしいし。ひょっとしたら、魂にも関係あるかもしれない」

「旅・ですか？」

俺達の思いつきを、エルエルは小首を傾げて聞き返した。

そう言えば、一緒に旅に出た機会はなかったか。

「そうだよ。今度、機会があったらエルエルも連れて行こう。ああ、でも心配だな」

「なんも心配することなんてないじゃろ。むしろ最強戦力じゃろうに」

「そうかもしれないけれども、俺達の旅って、結構思いつきじゃないか。旅っていうか放浪？……だが、そうだな。かわいい子には旅をさせると言うし。いや、しかしもう少し武装を強化してからの方が？」

つつい熱く思案に耽り出した俺に、エルエルが尋ねる。

「なぜ・旅を・するのですか？」

「旅？ そうだな……。ここではないどこかに行くため？ とかな？ 人によって理由はいろいろあるけど、とにかく外に出て、今までしたことのない経験をしに行く感じ」

俺の身近には旅をする人間が多い。カワズさんもそうだし、俺企画での旅は、ダークエルフのナイトさんやクマ衛門なども巻き込んで、頻繁に行われている。

「一番旅をしている人は・誰ですか？」

「知り合いで言うとなー戦士が一番かな？ 知ってる？ セーラー戦士」

誰が一番かと問われたら、そこはやはりセーラー戦士だろう。

あの子は日常が旅みたいなものだ。彼女にとって妖精郷は、ほんの一時休むための借りに過ぎない。

「はい・たまにやってくる・かっこいい金髪の人です」

エルエルがセーラー戦士のことを「かっこいい」と思っていたことがなんだかおかしかったが、そう思うのも無理はないだろう。

「そうだねー。かっこいいね。彼女はやたらと活動的だから。たぶん俺よりも人生の経験値は高そうだよ。気が済むまでそうできる姿勢は俺も見習いたいもんな。いつ帰ってくるかわかんないけど」

「旅に出ると・もう・帰ってこないんですか？」

「いいや帰ってくるさ。家に帰ってくるまでが旅ってものだよ。そうじゃないとつらいだろう？」

そう口に出してから、ふと気づいた。

セーラー戦士は、家に帰る方法を探しているんだった。

ってことは、ここにいる間でさえ、ずっと旅をしているような状態なのかもしれない。旅には多くの実りがあるだろうが、それではつらくないだろうか？

思考を戻して、俺はエルエルに向き直った。

「エルエルもそのうち一緒に旅に行こう。ペガサスを見に行ったときみたいに一人で行く」

立ち読みサンプル はこま